

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【指扇中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	各科目の領域ごとに知識・技能の理解度の偏りが顕著であることは明らかであり、方針の強化が求められている。生徒の個性による得手不得手な部分もあるが、やはり「学びの動機付け」が不十分であることが最大の課題である。来年度は生徒のつまずきを多種多様な体制で助力・共有しながら把握を行う一方で、偏りのないようこの単元も授業の導入や展開の更なる工夫が望まれる。また、ICTを活用し、指導の個別化を一層推進していく。	
思考・判断・表現	ICTの利用率の高まりから、思考した内容を生徒間で共有する場面が増加したことが結果に現れた。さらに、総合的な学習の時間等を中心としたESDをテーマとして柱に据え、生徒が「学びたい」と思える教育活動を展開したい。来年度は各単元の導入部分や単元末の部分で「学びの動機付け」を一層意識し、各教科の実態に合わせた方策を実施できるように環境を整えていく。	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題>各科目の領域ごとに、知識・技能の理解度の偏りが顕著である。 <指導上の課題>各単元の内容が生徒に印象付けられておらず、繰り返し学ぶ時間や指導の個別化が充分ではない。学習意欲を高める工夫が必要である。(学びの動機付け)	⇒ デジタル教科書やスタディサプリ等を活用する際、生徒のつまずきを机間指導等を通じて把握し、習得につながる支援・助言を行う。また、自身で学ぶ手段を選択できる時間を設定する。【R7年度さいたま市学習状況調査の教科の調査項目において、各教科の領域ごとの標準偏差が25pt以下】
思考・判断・表現	<学習上の課題>与えられた情報から判断して考察したり、自分事として捉えながら、自身の考えを表現したりすることが課題である。 <指導上の課題>ICTを通して生徒間で意見を共有したり、議論したりする「ICTを活用した協働的な学び」が十分に実践できていない。	⇒ 生徒同士の協働的な活動を重視し、ICTを活用して考えを共有したり、それを基に議論したりする。また、学校課題研究ESDにより、生徒が自分事として捉える姿勢の基盤を形成する。【R7年度さいたま市学習状況調査の教科の調査項目において、各教科で表現力をねらいとした設問に対する本校の正答率とさいたま市平均値との差が5pt以上高い】

⑤	評価(※)	調査結果	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	SAの協力やT・Tの体制により、机間指導等を通じて生徒のつまずきを把握し、習得につながる支援・助言を行うことができた。また、難易度に合わせて生徒が問題を選択する等、指導の個別化につながった。しかし、さいたま市学習状況調査の結果より各教科で各科目の領域ごとに知識・技能の理解度の偏りは顕著である。生徒のつまずきの把握から、学び直し等の手立てが必要である。	
思考・判断・表現	B	「個別最適な学び」についての研修を行い、それらを活用した公開授業を全教諭が行った。また、T・T等の指導体制により、生徒への個別支援の充実を図った。これらのことにより、学びの指標では良好な結果につながった。特に、授業内でICT等を通して個人の考えを共有して、協働的な学びを実践することができ、学びの指標アンケートではICTの利用についての数値が市平均を上回る結果となった。来年度以降も体制を継続し、思考・判断・表現の力を伸ばしていく。	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、知識・技能における正答率は全国平均に比べやや下回る結果となった。特に語彙の意味を正しく理解する力や、文脈に即して正しい漢字を使用する力に課題が見られた。科目担当と共有し、言葉や漢字に触れる機会を積極的に取り入れることで、改善できるよ努める。数学では、知識・技能における正答率は全国平均に比べ大きく上回る結果となった。しかし、特定の単元における用語を正しく理解する力や、グラフから情報を読み解く力に課題が見られた。用語については学び直しの機会を設けることとし、情報を読み解く力については、他教科と連携し、意図的に授業に取り上げていく。	
思考・判断・表現	思考・判断・表現における正答率は、国語と数学共に全国平均を上回る結果となった。しかし、国語では読み手の立場になって、手紙の文章の中から誤った表記を見つけ出す問題については、高い正答率を示す一方で無解答率は20ptとなった。数学でも問題の設定を読み解き、数量を推定する方法を見出す問題の無解答率に課題が見られ、与えられた文章の意味や語句の意味を正しく理解したり、はっきり示されていない数量関係を理解したりするなど、文章を読み解く力の定着が課題である。授業内でも積極的に取り上げ、様々な視点で文章に触れる生徒を育成する。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	各教科の知識及び技能において、取組の成果が見られた。市の正答率と比較して各教科の正答率が高い設問が多く見られた。しかし、国語では「我が国の言語文化に関する事項」、数学では「関数」、社会では「世界と日本の地域構成」、理科では「粒子・生命を柱とする領域」の単元における正答率が特に低い傾向が見られ、バランスの良い状態とは言えない。単元ごとの理解度の格差を埋めることが求められている。	
思考・判断・表現	各教科の思考力、判断力、表現力において、特に国語では「読むこと」、数学では「数と式」、社会では「近世までの日本とアジア」、理科では「エネルギーを柱とする領域」の単元における正答率が特に低い傾向が見られた。一方、市平均を下回る単元が存在することも事実であるものの、「知識・技能」と「思考・判断・表現」は相互に作用する関係にあることから、上記の課題に起因することと考えられる。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	机間指導を繰り返し実施する中で、個人の習得具合に合わせた個別の助言を行うことができた。自身で学ぶ手段を選択できる時間の設定率は高くはない。校内研修で課題に触れつつ、公開授業を行うことで、設定率を高めていく。	変更なし
思考・判断・表現	B	生徒がICTを活用して考えを共有する「じ・しゃ・く」の要素を取り入れた授業展開を多くの機会で行い入れることができた。また、ESDに関する講話を行うことで、ESDへの理解を高め、今後の方策をより効果的に進めるための基盤づくりが行えた。令和7年度全国学力・学習状況調査の質問調査の結果から、ICTの活用率はとても高いが、考えを発表する機会については多くなっていない。一層校内研修で授業研究を進めていく。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)